245 ^{99m}Tc ピロリン酸の骨シンチグラフィーによる乳癌骨転移の診断

放医研病院部
○石川達雄　栗楢　明　荒居竜雄
青木芳明　宮本忠昭
臨床研究部　舘野之男　力武知之

〔目的〕
^{99m}Tc 標識リン酸化合物による骨シンチグラフィーは、人体被曝の点、スキャン画質の点から優れたものとして臨床応用されて以来、多くの施設で用いられており、とりわけ悪性腫瘍の骨転移の発見には、現在有用な検査法となっている。

一方、骨転移の発現頻度の高い悪性腫瘍の１つに乳癌が挙げられるが、乳癌は、再発時期が比較的遅く、又、再発後の治療も効を奏する事が経験され、比較的予後良好な悪性腫瘍の１つであり、この点から、骨転移を早期に適格に診断する事は臨床上、重要な事となっている。そこで、乳癌の臨床に骨スキャンが用いられているが、その診断能は、尚、充分とは言えず、合併良性病巣にも集積を示す事が有る点から、転移巣か否かの診断に困難な事が経験されている。今回、我々は、乳癌術後患者に於ける骨シンチグラフィーについてその診断能、及び有用性について検討を行った。

〔方法〕検索対象は、放医研病院に術後照射の目的で来院した乳癌患者の中、^{99m}Tc ピロリン酸による骨シンチグラムを行った６１例であり、骨シンチグラムはこれらの症例の延べ８９回である。これら６１例の中 Stage の記載の明らかなものは５０例であるが、Stage Ⅰは１６例、Ⅱ　１９例、Ⅲ　９例、Ⅳ　１例となっている。骨シンチグラムは、^{99m}Tc ピロリン酸を投与後ガンマカメラにより行っているが、施行時期は、症例により、術後２２日より６年迄に亘っている。診断能の検討には、骨Ｘ－Ｐ、再検シンチグラム、症状、検査所見を対比させ、一部、剖検例の検討も加えた。

〔結果〕Stage の明らかな５０例について、骨シンチグラムで転移が発見され、Ｘ－Ｐ、再検シンチグラム剖検等から、骨転移と診断された症例は、１５例であった。Stage より、この骨転移をみると、Stage Ⅰでは、６％、Ⅱは２６％、Ⅲは４０％と Stage の上昇につれて骨転移率も高くなっている。又、この発見時期を骨シンチグラムの施行時期でみると、Stage Ⅰの症例は、術後３年の骨シンチグラムで発見されているが、Stage Ⅱの６例の中、最も早期のものは、５カ月、Stage Ⅲの４例の中、１例は、術后２２日で多発骨転移が発見されており、Stage により、シンチグラム施行時期に考慮が必要である。又、Stage の進んだ症例には、手術々式の決定、Stage の決定に、骨シンチグラムを考慮する必要があると思われた。

更に、骨シンチグラムの診断能について、Ｘ－Ｐ、検査所見、剖検等の因子からの検討を報告する。

246 骨スキャンで２年以上経過観察しえた前立腺癌１３症例

東京慈恵会医科大学・泌尿器科学教室
○大石幸彦，町田豊平，三木　誠，上田正山，
木戸　晃，柳沢宗利
東京都養育院付属病院・核医学放射線部
飯尾正宏，千葉一夫，山田英夫，松井謙吾，
村田　啓，川口新一郎

前立腺癌の骨転移を検索することは、治療方針の決定、予後判定の上で極めて重要である。われわれは、既に前立腺癌70症例に^{99m}Tc－燐酸化合物による全身骨スキャンを行ないその有用性を報告してきた。今回はこれらの症例のうち、２年以上骨スキャンで治療経過を観察しえた前立線癌13症例について検討した結果を報告する。

対象は組織学的に前立腺癌と確定され、約４ケ月～１年毎に２年間以上骨スキャンで経過を観察しえた13症例で、年令は50才～73才、平均６７.５才である。

方法は ^{99m}Tc －燐酸化合物６～１５mC、を肘静脈より静注２～４時間後に、Scanner 及び γ－カメラ、PHO/CON で全身をスキャンした。また、全例で全身骨スキャンとほゞ同時期にＸ線による bone survey、血清酸フォスファターゼ値、アルカリフォスファターゼ値などの検査を行ない比較検討を行なった。なお、ほとんど全例に antiandrogen theragy を行なっており、その治療の経過と骨スキャン像の推移、骨スキャンと予後などについて検討した。

その結果、初診時には臨床症状と骨スキャン、Ｘ線所見などが比較的一致する例でも、病状の進行と治療の過程では必ずしもこれら検査所見の一致がみられなかった。そこで、初診時のスクリーニングとしての骨スキャンの価値と経過観察における骨スキャンの価置と評価法について報告する。

Presented by Medical*Online